



## 連載開始にあたって

後藤 厚宏  
NTT

初夏を思わせるような力強い日差しと、少しひんやりとした春の風がちょうどすれ違う日に、ある支部総会に参加させていただく機会を得た。支部総会としての議事の中で、情報処理学会の年度計画案についてご説明の時間をいただき、支部活動にご尽力いただいている先生方、地元企業の皆さんから直接お話を伺うことができた。引き続き、支部の若手奨励賞の授賞式、大学の大きな階段教室を使ったオープンセミナーとしての講演会と、中身の濃い1日を過ごすことができた。

20年ほど前、研究会の幹事役を仰せつかっていた時期は、研究会や合同のシンポジウムで日本全国にお邪魔した。毎回、会場や懇親会の場所の手配など、その地域をご担当の支部の皆さんのご好意に甘えさせていただいた。今回、久々に支部総会に参加させていただくことになったのは、支部活動を少しでも活性化したい、という支部長さんからの提言に端を発する。これまで、支部長さんには東京で開催する支部長会議に年2回ほど集まっていたが、支部から本部の方向だけでは不十分であろうとの意見が出た。このため、学会の役員が分担で各地域の支部総会に参加し、情報処理学会の地方支部の課題、特に支部長の皆様やスタッフの皆様の悩みを直接聞き出す機会を設けよう、という取組みが今年からスタートした。これまでの「一方向の悩み相談」から「双方向の悩み相談」へと始まった試みである。しかし実際に支部の活動に触れてみると、支部活動の悩みの共有だけでなく、支部活動の「魅力の共有」が大切であることに気づく。各支部の支部長の方々、支部長を支えるスタッフの皆さんは、限られた支部会員の中で、支部としての魅力を引き出す活動に苦心いただいていることが実感できるためである。

昨今、「モノ作り日本」が後退するのではないかと

危機意識が高まっている。工学部人気は低下する中で、優秀な技術者の確保が技術関連産業にとって最重要課題になっている。一方、情報処理学会でも東京(首都圏)への一極集中の傾向が強まっているが、情報処理産業の主要企業は、本社が首都圏にあったとしても、営業支店はもちろんのこと、開発拠点や工場は全国に展開されている場合が多い。各地域の大学から排出される優秀な学生をいかに確保するかが技術系企業の将来を左右する。

一方、各地域の大学の先生方から、地域出身の学生や若手人材が活躍できる企業誘致活動に自治体と共同で取り組んでいるというお話を伺った。昨今はやりの「地産・地消」ならぬ「地人材・地活躍」というローカルな循環の活性化である。地域産業や新たに誘致した企業群に即した技術テーマを取り上げたり、電気関係学会の支部同士が連携して地域色豊かなシンポジウムや研究会を開催するなど、従来の学会活動の枠を超えた地域としての魅力作りは、情報処理学会の支部活動として興味深い。

つまるところ地域の支部活動をアピールする機会を設けることが肝心となり、今回、学会誌の連載コラムとして、支部の魅力をアピールしていただくこととした。本連載コラムでは、今回の北海道支部に第1走者を引き受けていただき、続いて、東北支部から九州支部まで、毎月1つずつ各支部活動をご紹介します。初回の北海道支部からは、支部主催の行事として開催されている情報処理北海道シンポジウムの表彰の中から、北海道の魅力ある特徴が満載の技術研究賞をご紹介します。"マリンプロードバンド"や"（観光産業の）風評被害"を扱った研究を評価する視点に「北海道ならではの魅力」を感じた。次回以降に紹介される"支部の魅力"が楽しみである。

(平成20年8月21日)